

能と日本人の基層に流れる宗教意識 (その2) —— 能・能舞台・能面と古代の宗教思想・遺骨信仰 ——

上川北部医師会会長 中村 稔

——本稿は名寄短期大学道北地域研究所「年報」第19号(2001年4月)
の再掲に追補したものである。——

1. 能舞台

初めて「能楽堂」を訪れて、屋内であるのに舞台に屋根がついているのを不思議に思う人が多いと言う。これは、かつて能が屋外で行われた名残りである。

図1のように、先ず4本の柱に囲まれた三間四方の空間を「本舞台」、その奥が囃子方の「アト座」, 「本舞台」右側に地謡方が坐る「地謡座」, ワキが坐る「ワキ座」, 「アト座」から斜め後方に続く細長い通路のようなものが「橋ガカリ」と言って歌舞伎の花道の原型となったものがある。「橋ガカリ」の奥が「鏡ノ間」, 又、舞台には象徴的な老松の絵が一枚、これが能舞台の総称である。舞台の正面にある「キザハシ」は能役者が出入りする所ではなく、能が武家式楽だった頃の名残りである。観客席は「見所」と言い、舞台を三方から囲んだようになっている。見所と舞台の間には白い玉砂利を敷きつめた「白州」があるが、これは桃山時代の能舞台の形式である¹⁾。「鏡ノ間」は装束をつけたシテ方が、能面をつけ、役に変心していくための精神統一を図る場所であるばかりでなくあの世でもある。「橋ガカリ」は“あの世”と“この世”を結ぶ通路でもあるのだ。「橋ガカリ」が何故左奥からあるのかについては、「絵巻物では神仏が左上方から来迎する。能の場合にもそんな伝統的な空間意識があるのではないか」²⁾。

能舞台は一見“何もない空間”と言ってよいが、目立たない形で絶妙な仕掛けと構造を持っている。これと正反対なのは、ルネッサンス期に造られた“テアトロ・オリンピコ”であろう³⁾。ここには演劇空間に必要なすべてのモノがあるが、積極的に劇的パフォーマンスを招き入れる場所がない。それに比べて能舞台には絶妙な演劇空間があり、それは日本伝来の“空白の美”と言ってよい。例

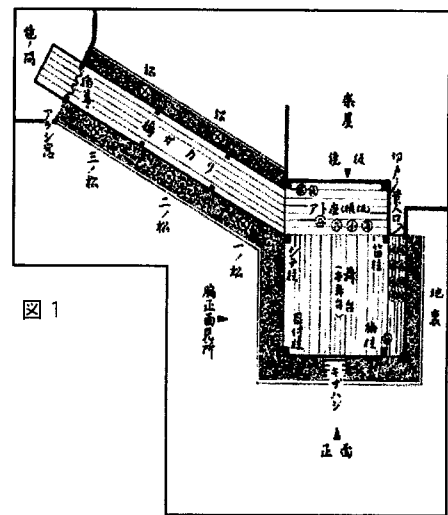


図1

えば、「橋ガカリ」の揚幕の奥にある「鏡ノ間」は「見所」からは見えない。しかし、見えない空間としての「鏡ノ間」は「橋ガカリ」を通して、“諸国一見の僧”や“怨霊”、“狂女”や“異類のもの”などが本舞台——この世——に現れる他界——あの世——であり幽冥界である。“見えない・見せない”ことによって、強く舞台空間を方向づけ、象徴的な老松一本の絵と相俟って、時空を超えたどのような場面をも現出させる働きを持つのである。

世阿弥はこの三方から見える空間を利用して、観客に“見る・見られる”身体のある方を考案しながら、時空を超え、意識・無意識、現世・彼岸を巻き込んで日本人の基層に流れる死生観——宗教意識を「橋ガカリ」を使って表現した。世阿弥ほど“見る・見られる”にこだわった能役者はいなかったのである⁴⁾。

2. 能面

仮面ではない日本独特の生きている“能面”に

ふれよう。「翁面」は能面ではない。「翁面」は古来「神」の化身として敬われてきた。日本人は「神」を表現する時、先ず老人を思い描いたのであろう⁵⁾。だから能家では「神面」と呼んでいる⁶⁾。

平安末期から鎌倉時代初期にかけて、豊作を祈る“田楽”が発達した頃、世界でギリシャ彫刻に匹敵できる見事な仏像彫刻を手掛けた鎌倉時代の仏師達にとって、顔面だけの彫刻は容易なものだった。“追難の鬼”に始まって種々の仮面を創り、やがて自分の持っている知識と技術、感情を傾けて種々の仮面を制作し、ここに、日本人の手によって、世界に例のない純粋な“仮面”でない“能面”が誕生した。能の歴史は約600年であるが“能面”はすでにその100年前に創られたのである⁶⁾。

華やかな室町文化を開花させた足利三代將軍義満は、本『年報』第18号で述べたように、応安7年の「今熊野能」で観阿弥・鬼夜叉の“猿楽”を観て以来二人を庇護し、ここに二人の天才人は“能楽”大成の道を築いた。観阿弥が白拍子の“曲舞”^{くせまい}をとり入れて3作、世阿弥が50作以上の能を創作し、“夢幻能”を確立^{7) 8) 9)}。ここでは男女の仮面が必要となり、10人の面工達は、世界に例のない、しかも現代まで伝わる「生きた仮面」——「能面」を完璧なまでに創った²⁾。種類は100を超えるが、やはり代表的なのは女面——小面であろう。

「人が見るのではない、面がみるのである」。これは先代金剛巖の名言である⁶⁾。又現代能の旗手だった観世寿夫は、「能役者が“めん”と呼ばずに“おもて”と呼び慣わせているのも、自分の創出する世界と観客との窓口と思い、自分と一体となって舞台を盛り上げてくれる仲間と思う願望が含まれているのであろう」と書いている¹⁰⁾。

既に世阿弥が素面を“直面”^{ひためん}と呼んでいるように¹¹⁾、能面こそが真の顔であり能の表現の中心なのである。「演者は能面のなかに全精神を込めるのである」¹²⁾。

「能面のような無表情」という表現があるが、能面は動きのある舞台上で生かされるように工夫されている。喜びや悲しみ、死や生を表現し、長い時間に耐えるため、一見して無表情に近い中間的な表情——無限表情をたたえているのである¹³⁾。そして能面をややうつむかせて嘆きや悲しみを表す「クモル」、やや仰向かせて喜びを見せる「テル」、一点から一点まで激しく面を動かす「面を切る」などによって芸を表現するのだ¹²⁾。

能は能面によって人間の生の肉体の表現を否定し、より高度な感情表現を可能とした。これは世



図2

界に類例のない能の逆説的な美学の成功に他ならない^{10) 13)}。

子供に能面（例えば小面 図2）を見せると恐ろしがると言う。舞踏家の大野一雄は、「能面は死の表情だ」と言い、多木浩二は、「能面は死に向かっている表情だ」と書いている⁴⁾。能は最終的には鎮魂の方に向く傾向があり、生死の感情を表現できる面が創られた。世阿弥は能面に対応する身体動作を創りながら、本『年報』第18号で触れたように、日本人の基層に縄文期から流れている死生観を世界最高の鎮魂劇——「複式夢幻能」によって具現化したと言ってよい¹⁴⁾。

3. 日本古代の宗教思想

日本人の多くは神道とともに仏教の信者と言ってよい。その流れはもう1300年も続いているのである。もともと神道という言葉は日本になかったが、仏教という外来の宗教に対し、古代から流れる日本固有の信仰を示す言葉として鎌倉時代に使われたのである¹⁴⁾。仏教は神道と天下分け目の戦いに勝ち、律令国家づくりのイデオロギーとなった¹⁵⁾。しかし、仏教が日本に根づくためには神道との共存が必要だった。それが容易にできたのはいずれも多神教^{さんぜんそうもくしつがいじょうぶつ}だったからだ。天台宗における「山川草木悉皆成仏」は決して仏教本来の思想ではなく、「生きとして生けるものに神が宿る」という縄文以来の日本の土着思想によって日本化された仏教思想である¹⁶⁾。そして神道信仰は、沖縄から北海道に亘って1万年以上続いた豊かな文明に支えられたとされる日本縄文期に形成された日本人の基層に流れる広い意味での宗教意識の基礎と言ってよい^{14) 15) 17) 18) 19) 20) 21) 24)}。

縄文人は日本の豊かな自然(巨木や大きな岩石)に神をみた。その破壊は先ず怖れであり、やがて破壊したもの(例えば雷など)に神をみたのであ

ろう。人の死も畏怖であり、やがて愛惜・追憶が加わったのであろう。畏怖には発掘された手足をばらばらにしたり、石を抱かせる「屈葬」や古事記の“イザナギ”、“イザナミ”によく表れている¹⁹⁾ ²³⁾。なお、「屈葬」と「伸展葬」が並列されていることもあり、畏怖、愛惜、追憶ばかりではなく或る程度の階層化があったのではないか¹⁸⁾。日本の縄文期は決してマルキストが言うような無階級の貧しい原始共産制ではなかった。階層があり、リーダー階層がいなければあの豊かな縄文期が1万年以上続く筈がないのだ。いずれにしても、その時代はアニミズム・シャーマニズム全盛であった¹⁹⁾。

古代人にとって死は魂が肉体を離れることだった。魂が離れた肉体は“なきがら”、“むくろ”と言ひ、近くの山に捨てられ、魂は“あの世”にいき、正月やお盆に帰ってくると信じられていた。將に循環型思想と言つてよい。その名残りが西日本で多く見られる両墓制や東北に残る山岳信仰であろう¹⁴⁾ ²¹⁾。

仏教が深く浸透しない縄文の面影を残すのは沖縄と東北であろう¹⁴⁾ ²¹⁾ ²²⁾。儀式でも主役は坊さんではなく、シャーマンの流れを汲む巫女（東北ではイタコ・ゴミソ、沖縄ではユタ）である。東北で代表的なのが「恐山」だが東北各地に散在して残っているし¹⁴⁾ ²¹⁾、神仏混交を象徴する古代人の山岳信仰の原風景は現在でも各地でみられる²¹⁾。

梅原が辿り着いたのはアイヌだった。仏教の影響は全くない。ユーカラによると、英雄が死ぬとその場面が終わり、次に英雄の魂が自分の“むくろ”を鴨居から見ていると場面となる。魂は暫らくは家に留まる。その期間が7・7・49日だと言ふ。梅原が観た「黒川能」でも神は鴨居におられた¹⁴⁾。（後述）

四国の徳島から高知の一部でも、49日間、“四十九餅”、“四十九団子”という習慣が残っている¹⁹⁾。

沖縄では死は魂が肉体から離れることであるが、魂は身体に住み込み死体が腐食して初めて純化する。死体は臭気が消えて初めて魂は純化される。風葬は臭気が消えるまでです。主役は“ユタ”である²⁰⁾ ²²⁾。

「記紀」によれば、天皇が逝去すると魂を呼び戻そうとした。これが「魂呼び」、^{もがり}「殯」²³⁾である。それは死者の霊への愛惜・哀悼とともに畏怖・崇りへの鎮魂の儀式だった。逆にあの世に行くのをいやがる魂を説得することもあった。東北でみられる“ゴミソ”の役割りだった。こんな日本の鎮

魂の伝統が儀式として残り、やがて日本仏教にだけ残る「引導」となった。鎮魂儀式の大成者は真言密教の空海であり世阿弥だと言つてよいであろう¹⁴⁾ ²⁰⁾。

これらをもみても、霊肉分離が簡単に行われない日本人の基層に流れる宗教意識＝霊肉一元論の原型がある。それを端的に表現したのが道元の「身心一如」であろう²⁵⁾。

ここで前述した黒川能にふれよう。五流能とは異なる地方能であるが、不思議なことに縄文の色が濃く残る東北地方に集中している。代表的なのが黒川能である。櫛引町黒川の春日神社に捧げる神事としての町民あげての能である。この能に古代人の死生観がみられるのは梅原が指摘した通りである¹⁴⁾。

4. 遺骨信仰

近年、縄文期の発掘が日本各地で進められているが、現在の神社も、かつて古代人が祀っていた神の地や聖地（ストーンサークルを含む）にあることが多い²²⁾。私達はやはり縄文以来の神道の流れの中にあり、それがかつての「鎮守の森」だったのであろう。

山折哲雄によれば⁵⁾、縄文・弥生・古墳期の発掘状況をみても遺骨を尊重する痕跡はない。ところが11世紀になって仏式火葬が貴族に先ず受容され、「高野聖」という下層僧こうやひじりが各地を廻つて「高野山納骨」を進めたことが、もともとあった山岳信仰と相俟つて納骨が盛んになり、近世になって寺や墓への納骨が一般的になった。

ところが「満州事変」が始まった昭和6年以後遺骨信仰が大きく復活する。「遺骨還る」、「英霊還る」が一群のタイトルだった。遺骨がなければ石が詰められていた²⁶⁾。

戦死者の遺骨を「英霊」と称し、社会的に追悼する行事が定着するのは日中戦争以後である。それが戦後新たに展開を見せることになる。遺骨収集の事情がそれである。大東亜——太平洋戦争で海外での戦没者は約240万人。その殆どは旧戦域に残された。骨どころか遺品もない。このためか、例えば航空機事故では、“熱狂的”と外国人に言われるような遺骨、遺品収集として現れたのである。確かに身心分離が容易でないのが日本人の基層に流れる広い意味での宗教意識だった。しかし、現在そこにあるのは単に遺骨や遺品に執着する宗教意識とは無縁の単なる骨好きの傾向なのではないか。山折哲雄が皮肉を込めて、「宗教嫌いのお

墓好き、信仰嫌いの骨好き」と言う時代なのではないか²⁷⁾。「身心合一」という人間の在り様なのにも、権利と責任の主体のないのが現代なのではないか²⁸⁾。これでは世界に向けて日本人の“アイデンティティー”を根拠づけられないのではないか。“モラルハザード”を克服しなければ、私達日本人に救いはないのではないか²⁹⁾。

ヨーロッパの哲学界では1960年代に、“構造主義”が提唱され、その後反^{アンチ}哲学の名において、デカルト以来の二元論で「身体と精神」と言った対比のなかで身体が貶められていたのが否定され“活動する身体が精神”であるという「身心合一」が主流になった³⁰⁾。しかも、“構造論”は“場所の論理”であり、それは、西田幾太郎が1927年に世界で初めて提唱したものだった。西田の出発点は「善の研究」における“純粹経験”であり、その基本論になったのは、「身心合一・主客合一」だった。その根拠を求めて西田が辿りついたのが“場所の論理”であり、左右田喜一郎によって初めて「西田哲学」と固有名詞で呼ばれたのであった³¹⁾。西田は戦後マルキストによって社会論・歴史論の弱点をつかれ、一方的に否定された。しかし、その内容の豊かさによって1980年代に世界的に再評価され、20世紀を代表する哲学者の一人となったのである³⁾。

——戦前・戦後を通じて現代でも世界に遜色ないと言ってよい日本が生んだ最高の哲学者西田幾太郎については、深層心理や精神病理、世阿弥との関わりで稿を改める。——

※私の妻 中村綾子は、能楽喜多流を学んでいる。彼女は、平成元年、札幌市民劇場で、能「一角仙人」のシテ方として札幌能楽会としては初めて「札幌市民芸術祭賞」受賞の栄に浴している。

参 考 文 献

1. 山崎有一郎『能楽入門②』小学館 (1999)
2. 松岡 心平「世阿弥の身体性」『国文学』35巻2号所収, 学燈社 (1987)
3. 中村雄二郎『西田哲学の脱構築』岩波書店 (1989)
4. 多木 浩二・大野 一雄「対談 世阿弥の身体性」『国文学』35巻2号所収, 学燈社 (1987)
5. 山折 哲雄『日本人の宗教感覚』NHK出版 (1997)

6. 横道萬里雄『岩波講座 能・狂言VI』岩波書店 (1999)
7. 北川 忠彦『世阿弥』中央公論社 (1993)
8. 表 章『岩波講座 能・狂言I』岩波書店 (1999)
9. 堂本 定樹『世阿弥の能』新潮社 (1997)
10. 西野 春雄『岩波講座 能・狂言III』岩波書店 (1999)
11. 世 阿 弥『風姿花伝』岩波書店 (1958)
12. 梅原 六郎『能入門②』小学館 (1999)
13. 橋岡 一路『能面集』能楽書院 (1985)
14. 梅原 猛『日本人の魂』光文社 (1992)
15. 同前『聖徳太子』小学館 (1985)
16. 同前『あの世と日本人』NHK出版 (1996)
17. 田中 義広「不死と変貌」『文学』vol.45所収, 岩波書店 (1977)
18. 小林 道雄『縄文人の世界』朝日新聞社 (1996)
19. 新谷 尚紀「蘇えるアニミズム」『季刊仏教』所収, 法蔵館 (1996)
20. 西郷 信綱『文化人の死』平凡社 (1999)
21. 山折 哲雄他「東北と日本の原風景」『中央公論』1999年11月号所収, 中央公論社
22. 関谷 公二「南の精神誌」『新潮』1999年12月号所収, 新潮社
23. 久保田展弘『日本多神教の風土』PHP研究所 (1997)
24. 小林 正憲『宗教とは何か』NHK出版 (1997)
25. 道 元『原点日本仏教の思想 正法眼蔵』岩波書店 (1985)
26. 山折 哲雄「信仰心を忘れた日本人」北海道新聞 (夕刊) 2001年8月16日
27. 『日本万葉集』講談社 (1979)
28. 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波書店 (1991)
29. 同前『場所一トポス』弘文堂 (1989)
30. 同前『西田幾太郎』岩波書店 (1985)
31. 左右田喜一郎「西田哲学の方法について」『西田幾太郎選集別巻1』燈影舎 (1998)